

「上ノ国の中世の館（たて）」 （上ノ国町）



上ノ国町の夷王山中腹に広がる山城「勝山館」跡。松前藩の祖とされる武田信広が15世紀に築城し、200戸以上の和人とアイヌ民族が一緒に暮らしていた。北海道の中世史には謎の部分も多いが、勝山館・夷王山墳墓群の調査により、歴史のミッシングリンクを埋める多くの資料が発掘された。日本海を一望する館跡からは中世のロマンが感じられる。



江戸時代の日本で最後に築城された城郭で、箱館戦争では旧幕府軍と官軍の戦場となった。城の北側には道内唯一の近世的な寺町があり、龍雲院、法源寺、松前家の菩提寺・墓所など五つの寺が現存している。また、城と寺町の一帯は北海道でもっとも早く見ごろとなる桜の名所でもある。松前町の歴史を知ることは開拓以前の北海道の歴史を理解する上で重要。

「福山（松前）城と寺町」（松前町）

「函館山と砲台跡」（函館市）



華やかな夜景で有名な函館山にはもう一つの顔がある。津軽海峡を望む函館山は明治中期に要塞化が進められ、多数のレンガ壁・コンクリート洞窟掩蔽壕・砲台座が残る。大規模の旧状を残す軍事土木遺産は全国的にも例が少ない。終戦まで立入制限されたため、今も貴重な動植物の宝庫となっており、自然に触れる散策コースとして市民に親しまれている。



函館市電は明治期に馬鉄で出発し、1913（大正2）年に電車化、今も市民の足として定着している。路面電車が醸し出す風情を含めて観光都市・函館で果たしている役割は大きい。1917（大正7）年に始まった札幌市電は、路線の拡大や車両の改良を加え都市交通の中心だったが、地下鉄の開業などによって現在は1路線のみが運行。市民の愛着は強い。

「路面電車」（函館市、札幌市）

「アイヌ語地名」（北海道各地）



北海道の地名の約8割はアイヌ語に由来するとされている。アイヌ語の地名は、知らない場所でも、その名から地形や位置づけなどが分かるものとなっており、現在は片仮名や漢字で表記され原音と異なる場合もあるが、本来はアイヌ民族の自然と調和した伝統的生活の中から歴史的に形成された。アイヌ文化の意義を理解する重要な手がかりとなっている。



世界の各民族には、それぞれ独特の精神的意味合いを含めた「文様」がある。アイヌ文様の基本は「渦巻き（モレウ）」「とげのある形（アイウシ）」「うろこ（ラムラムノカ）」の三つ。これらを組み合わせ、連続した線でむすんでいく。その形状、図案や色彩は、印象深い美的価値を含んでおり、文化的にも秀逸なものとして近年、注目が高まっている。

「アイヌ文様」（北海道各地）

「北海道のラーメン」（北海道各地）



ラーメンの起源は諸説あるが、戦後急速に北海道民の食生活の中に定着し、寒冷な気候から、コクがあり濃い味のラーメンが、北海道の代表的な食文化として発展した。ラーメンは、北海道の観光資源としても欠かせない存在であり、札幌・函館・旭川・釧路など、地域ごとに特色を持ったラーメンが脚光を浴び、ご当地ラーメンブームの火付け役となった。